

[ワークショップの趣旨]

項の具現化に関わる研究は、つねに言語学の主要課題の一つである。とくに語彙意味論の分野では、明らかにすべき第一の課題とされ、動詞の意味構造の分析を中心に研究が進められてきており、構文交替などの意味と統語のインターフェース、語形成における意味と形態の関わりなど、多くの重要な成果がある。他方、複雑事象名詞の研究、クオリアの共合成の研究、構文文法の枠組みに依拠した研究など、経験面と理論面の双方において、動詞に依存しない項の具現化の探究も行われている。動詞を中心とした項の具現化に関わる研究が量的にも質的にも多くの成果を挙げている一方で、動詞以外の品詞がどのように項の具現化に影響を与えるかについては、理論の構築もさることながら、理論を精査するために、これまで以上により多くの言語事実の解明が必要とされている。

そこで、本ワークショップでは、異なる4つの言語（日本語、英語、中国語、ハンガリー語）を取り上げ、それぞれの言語で、動詞以外の成分が文の成立に必要な参与者（項）の決定に寄与する現象を考察する。4言語のデータを傍証にすることで、項の具現化に関わる全体像の解明につながる研究材料を提供し、また、複数の言語を考察の対象にすることで、通言語的に見られる特徴と言語特有の特徴を浮き彫りにすることを目指す。

[ワークショップの構成]

1. ワークショップの趣旨説明（9時40分～9時45分）
2. 口頭発表×4件（9時45分～11時05分）
発表順：臼杵岳、工藤和也、于一楽、江口清子（各20分）
——休憩（5分）——
3. 全体の総括および質疑応答（11時10分～11時40分）

[各発表の題目と要旨]

発表1：日本語における統語的名詞化と項構造に関する一考察

本発表では、日本語の「-方」名詞節に生起することの出来ない(1)の結果構文、小節構造を持つ「思う」や、(2)の副詞の解釈に焦点を当てることで項の具現化に関する新たな知見を得られると議論する。

- (1) a. *太郎の壁の青い塗り方 (cf. 太郎が壁を青く塗った)
b. *娘のかわいい思い方 (cf. 娘を可愛く思っている)
- (2) #論文の興味深い読み方 (cf. 論文を興味深く読む)

Kishimoto (2006)、瀧田 (2020) では、日本語の「-方」名詞節に関して興味深い事実と分析を提示し、統語的には「-方」が補部にvPを選択するとしている。しかしながら、これまでの先行研究では、「-方」が補部にとるvPの選択制限に関してはあまり議論されてこなかった。例えば、(1)に示す結果構文、小節構造を持つ「思う」の非文法性、(2)の主語指向性副詞の動作主の主観・判断を表す解釈が不可能なことは見過ごされていたのである。そこで、本発表では、上記の現象に関してそれぞれの構文と副詞の認可にはvPより上位に併合する機能範疇の介在が必要であると提案し、「-方」名詞節での非文法性に理論的な説明を与えるを試みる。

発表2：英語における非典型的な項の具現化 –場所主語構文を中心に–

本発表では、英語における非典型的な項の具現化に焦点を当て、中でも主語が動詞の純粋な付加詞的要素である(1a)の収容構文 (accommodation construction; 以下、AC) と(1b)の場所主語中間構文 (location subject middle construction; 以下、LSMC) について、どのようなメカニズムでこれらの構文が可能になるかを検討する。

- (1) a. This bed sleeps five people. / My car seats four people. / The game plays up to 7 players.
b. This lake fishes well. / This studio records well. / That green plays badly.

具体的には、ACについて、Lin (2001) の軽動詞分析を参考に、この構文における主語と目的語がそれぞれ異なる動詞（軽動詞と本動詞）から別々に選択されていると主張し、表層の構文形式は本動詞が軽動詞に編入した結果と考えることによって、①外項が抑制されていない、②総称性が不要である (*This bed can easily sleep John and Mary with room to spare.*)、③Stage-level predication としても使える (*This bed is sleeping two people now.*) などの LSMC とは異なる構文的特徴が説明されることを示す。

一方、LSMC の派生については、当該構文がいわゆる話題解説構造 (topic-comment frame) を取ると仮定し、主語名詞句を主語位置に基底生成し、動詞句に主語名詞句のクオリア構造 (Pustejovsky 1995) の目的役割に記載されているイベントを反映するという新たな項の具現化のルールを提案する。

発表3：中国語における非典型的な主語構文 - 「マラソンが 20km を走った」はなぜ言えるのか -

本発表では、Lin (2001) で非典型的な主語の構文の一つとして議論されている (1) や (2) のような中国語の例に関して、これらの文が成立するメカニズムについて検討を行う。

- (1) 这场马拉松 跑 了 二十公里。
 このマラソン 走る ASP 20km
 Lit. 「このマラソンが 20km を走った。」 (=このマラソンは (選手が) 20km を走ったところだ。)
- (2) 这个计划 写 了 五篇报告。
 この計画 書く ASP 5つの報告
 Lit. 「この計画が 5つの報告を書いた。」 (=この計画は (誰かが書いた) 5つの報告がある。)

(1) や (2) においては、動詞の動作主が具現化されていないこと、そして動詞の項構造に記載されているとは考えにくい項が主語に現れているという点で、非典型的な主語をもつ構文であると言われている (cf. Lin 2001)。このタイプの構文は、Lin (2001) でその事実が指摘されて以降、あまり研究がされていないのが現状である。

そこで、本発表では、まずは、このタイプの構文に相当する例を提示すること、そして、この構文に見られる文法制約を記述することに重点を置きたい。その上で、このタイプの文が成立するメカニズムについて検討を行う。代表的な先行研究の Lin (2001) の軽動詞を想定した移動分析を概観し、代替案として、当該の非典型的な主語構文は、“有” (ある) の所有文を事象化した構文で、事象化する際に主語と目的語と意味的に結びつきが強い動詞が現れ、文構造の決定には主語名詞の意味に大きな比重があることを提示する。この代案の根拠として、通常、所有文の目的語名詞に観察できる定性の制約が当該の構文でも観察されるなど、文法的共通点が見られることを挙げる。Lin (2001) の分析では、定性の制約は予測ができない。

発表4：ハンガリー語における非典型的な項の具現化 - 「痺れ」はどこからやってくるのか -

本発表では、ハンガリー語における非典型的な項の具現化の一例として、動詞接頭辞 *el-* (*away*) をともなう構文について考察し、この構造がどのようなメカニズムによって可能になるのかを検討する。

ハンガリー語は形態的に自他動詞を明確に区別する言語であり、構文交替は、基本的に動詞接頭辞付加によって発現することが知られており、この複合体全体の項構造は、従来、動詞接頭辞と基体動詞それぞれの項構造に基づいて決定されると考えられてきた。しかし、動詞接頭辞付加によって生み出された新たな動詞が、動詞接頭辞、動詞それぞれの意味からは想定されないような意味を持つ場合がある。例えば、*el-alszik* (*away-sleep*) という、動詞接頭辞と非能格自動詞の組み合わせは、自動詞として「寝入る」「朝寝坊する」の意味で使われるが、電車などを対格目的語として取り「(寝坊して) 乗り損ねる」、「首」「肩」などの身体部位の対格目的語を取り「寝違える」という意味の他動詞としても使われる。日本語の「寝違える」は、「首を違える」と言うことができることから、「首」などの身体部位は動詞「違える」の項であるのに対し、ハンガリー語の *alszik* (*sleep*) はそれ自体で内項を要求することはないし、*el-* が目的語を取ることはないため、両者が結びついた後にこの項が要求されると考えられる。

そこで本発表ではフレーム意味論 (Goldberg 2010 他) による分析を試み、このような項は、動詞接頭辞と基体動詞の意味フレームを構成するフレーム要素が合成されることによって出現することを主張する。